

# 「星の王子さま」

大 賀 淳

## I

サン・テグジュペリが「星の王子さま」を書いてから、ちょうど半世紀が過ぎようとしている。

一九〇〇年に生れたサン・テグジュペリは、世界が世界的規模で旧秩序から脱却しようとして様々な動きを始める、人類始つて以来の激動の二十世紀前半の苦難の道を、彼の言う「認識するとは、論証することでも、説明することでもない。それはヴィジョンに近づくことである。しかし、見るためには、まずもって参加するのがぞましい。それは厳しい修練である。」(戦う操縦士<sup>129</sup>)「傍観者という役割は昔から僕の嫌いなものだ。参加しない位なら、僕に果して何の価値がある？僕が存在するがためには参加を必要とするのである。」(戦う操縦士<sup>130</sup>)という言葉の通り、「参加する」ことによって真摯に生きた。

一九〇〇年六月二十九日、フランスのリヨン市に生まれたのであるから、第一次世界大戦の頃はまだ子供であったが、ロシアにソヴィエト共産主義革命が起つた時は十七才になっていた。中国に対する欧米諸国や日本の侵攻

があり、ファシズムが起り、ヒトラーやムッソリーニが現われ無気味な様相を呈している。スペインでは市民戦争が起り、その内戦は無漸なものがあった。

ロシアに赴き、スペインに飛んで、イデオロギーの対立と、戦争か平和かの問題に、サン・テグジュペリの心は乱れ傷むのであった。「手帖」や「人生に意味を」等に、彼の思索と平和への絶叫が読みとれる。

ついに、一九三九年第二次世界大戦が始まり、一九四四年七月三十一日コルシカ島のボルゴ基地からフランス本土の偵察飛行に出たまゝ還らなかつた。

休む暇のない争乱と破壊の時代、そうしてキリスト教文明の衰退と西欧民主主義の危機とそれへの懐疑が、またこれらのことが誘い水となる、人間とは何なのか、また社会とは世界とは何なのか、個と全体との関係は如何なるものなのか、また神と人間とは等々、サン・テグジュペリの内心深く、常に考え求め続ける日々を、彼に課したのであった。

「人間の土地」の中でイデオロギーについて「イデオロギーを議論し合ったところになにになろう。すべてのイデオロギーは論証されうるだろうが、この種の議論は人間の救済について絶望させるだけだ。いっぽう、われわれの周囲で、いたるところ、人間はおなじ欲求を表明しているのである。」（「人間の土地」<sup>194</sup>）と述べているが、第二次大戦で、前代社会の終局が来て、やがて冷戦の時代を迎え、東西二つの大きなイデオロギーが対峙し合つて、世界を大きくゆさぶつた。そうして今、東の共産主義社会は解体され、あちこちでいまだに争乱が絶えず、新しい秩序も生まれていない状況を、サン・テグジュペリが観るとしたら、どのような思索を彼は続けるのであろうか。

激動の中、死を賭して生きた、このサン・テグジュペリの生前に出版された最後の作品である「星の王子さま」について考えたい。

サン・テグジュペリが「星の王子さま」を書いたのは、亡命先の米国において、第二次世界大戦たけなはの一九四二―四三年にかけてであり、四三年四月に米国で出版されている。

その前後における、サン・テグジュペリの置かれていた状況は、いろいろな人々の書いたものから要約すると、次のようなものであった。

一九三九年九月一日、不当にポーランドに侵攻した、ナチスのドイツに対し、フランスが宣戦を布告し、サン・テグジュペリは即刻、予備大尉として召集され、トゥールーズ＝モンテードラン基地で、航法の教官に任命されるが、戦場に赴くことを熱願して、オルコントの2―33偵察飛行大隊に配属された。この頃「星の王子さま」の初稿が執筆されたとされている。

翌一九四〇年五月九日、ドイツ軍の大攻勢が始まって、フランス軍は敗走し、南仏を除いてドイツ軍の占領下に入る。

そしているうちに、サン・テグジュペリは十一月に亡命することを考え――動機が何であったかははっきりしていないが、山崎庸一郎氏の書かれたように、サン・テグジュペリは自分を放蕩息子にたとえてはいるが性急でわがまゝな出奔であったと思われる。

苦勞の末、リスボンを経て米国に渡り、ニューヨーク、セントラルパークの一遇に居を定めた。妻のフォン・コロンプも一緒であった。

しかし、在米フランス人達は、ドウゴール派やヴィシー派、中間派と別れて、互に中傷、批判しあつて一つに纏まらず、サン・テグジュペリを悩ませた。

一方、彼の祖国フランスは、北アフリカへの英米連合軍の上陸——サン・テグジュペリの望んでいたもの——に対する報復行為として、フランス南部自由地帯がドイツ軍に占領されるという非常事態に直面して、サン・テグジュペリの心痛は絶えなかつた。

そこで、一九四二年十一月十三日、サン・テグジュペリはモントリオールのカナダ紙に「フランス人への手紙」を発表した。それが十九日、ニューヨーク・タイムズ・マガジンに転載され、さらにフランス語放送をもつ全米の放送局により放送され、一部は北アフリカの新聞にも転載された。それは次のようなものであった。

『ドイツの夜が祖国を葬りさつてしまった。いまではフランスは、沈黙そのものにすぎない。われわれの政治論議は幻想の論議であり、われわれの望みは滑稽なのである。われわれはフランスを代表してはいない。奉仕することしかできないのだ。……かなたフランスの人びとこそ、まことの聖者なのである。……フランス人諸君、奉仕するために、おたがいに和解しようではないか。』

国務長官コーデル・ハル氏に……次のような電報を打ってもらいたいのだ。「われわれは、合衆国の全フランス人の動員を希望しているのです。」……

フランス人諸君、和解しようではないか。われわれが爆撃機にのりくみ、五・六機のメッサーシュミットにいどみかゝるとき、古い論争がわれわれをほゝえませるだろう。』(「人生に意味を」)この呼び掛けのメッセージに

より、自分もフランスに戻って戦線に参加する決意を語ったのであった。

それは アンドレ・ドゥブオー（「サン・テグジュペリ」<sup>60p</sup>）が言うように、文明を救うことであつた。

サン・テグジュペリによると文明とは次のようなものであつた。「一つの文明とは、いくたの世紀を通じてゆつくりと獲得された、信仰と習慣と知識との遺産である。これらのものは、しばしば論理によつて正当化することは難しい。だが、いづこかへひとを導きゆく道路と同じように、それ自体によつて正当化される。なぜなら、それらは人間に広がりを開示してくれるからである。」（「戦う操縦士」<sup>84p</sup>）

「文明というものは一つの目に見えぬ財産なのである。それは事物にささえられているのではない。事物をひとつずつむすびつけていく、目にみえぬきずなにささえられているのだ。それ以外ではありえない。」（「人生に意味を」<sup>226p</sup>）

そうして彼は次のように憤慨し歎くのである。「なぜ憎み合うのか？ぼくらは同じ地球によつて運ばれる連帯責任者だ、同じ船の乗組員だ。さまざまな文明が新しい綜合を生み出すために各種の文化が対立することはいいことかもしれないが、これがおたがいに憎みあうにいたつては言語道断だ。」（「人間の土地」<sup>196p</sup>）

このメッセージによつて、在米のフランス人の間に新たな波紋をまき起し、中傷・非難にあつて、孤立と沈黙のうちに、一九四三年五月、サン・テグジュペリは一人フランスに帰り着き、二ノ三三偵察飛行隊の第二中隊へ配属された。

このような彼自身と世界の状況の中で、米国において、「戦う操縦士」や「ある人質への手紙」、また「城砦」の草稿が書かれており、有名な「星の王子さま」もまた書かれたのである。そうしてこの「星の王子さま」は、

サン・テグジュペリがフランスに戻りついた後、一九四三年四月、ニューヨークで出版され好評を博したのであった。サン・テグジュペリの生前に出版された最後の作品である。

## II

注(リュック・エスタン「サン・テグジュペリの世界」による)

文学のジャンルとして「星の王子さま」は「南方郵便機」と「夜間飛行」のような小説化されたルポルタージュや、「人間の土地」・「戦う操縦士」・「ある人質への手紙」のような直接的証言と違い、死後出版される「城砦」と共に寓意物語に入れられているが、箴言風の「城砦」とは違い、美しいストーリーのある童話である。

サン・テグジュペリが祖国フランスに居る親友レオン・ウエルトに献じたのであるが、その簡潔で思いやりのある、感慨を込めた献辞の中で、「その大人の人が、かつて子供であったその子に此の本を献げたい。」と語っているように、子供のための本とはいえ、まだ天真な子供心を失わないでいる、純粋な大人へ贈る、子供のための本である。

前述した諸著作は、サン・テグジュペリが思索を重ねた末、人間と神と文明を語る、やゝ説教めいた、読むのに骨の折れる論説的著作であるのに反し、この「星の王子さま」は新鮮な感動を呼びおこす、一抹の哀愁に覆われた夢と希望を与える物語である。

前述した状況に置かれていた彼は、その思索や教説は「城砦」の草稿に綴りつゝ、一方詩人の心にかえって、一切の論理、教説を越えた、純粹感性による一編の詩的物語を、素直に語ったのだと思われる。

極限状況に置かれたサン・テグジュペリは、論理的思惟を越え、持つて廻った人間論、文明論を飛び越えて、

静かに内心に、彼の人間性の中核に子供の頃から育まれた純な感性を「星の王子さま」という彼自身の象徴に托して、優しく静かに物語りだしたのだと思はれる。

いろいろな人がこの作品について論じているが、各々それはそれで面白いし或る程度の当は得ていると思われる。一・二例をあげると、MLフォン・フランツの「永遠の少年―星の王子さまの深層―」で、このユング派の精神分析学者はこのなかで、「永遠の少年」の病理を、母親コンプレックスの病理として抉り出し、否定的見解を示している。

また塚崎幹夫氏は「星の王子さまの世界」(中公新書)の中で、物語の中に出てくる絵や話の背後に、明確な事実の裏付けがあると指摘し興味ある見解を表明している。

それぞれに有意義でもあり関心をひくものであるが、私は、作家の人となり、伝記、その時の世界の事時を捨て、昔話しに対するように童話としてこの作品に接し、作者の他の著作における思惟のあとを考慮して、この作品からのみ作者の真意を汲みとり、物語を鑑賞するのがよいと考える。

### III

星の王子様はII話から登場するのであるが、話者である飛行士が、発動機の故障で砂漠に不時着し、人里から千哩も離れた砂の上で眠りに入った時、「どうぞ、僕に羊の絵をかいて丁戴」という不思議な声に起こされるところである。

その前段の1話で短い話者の自伝が紹介されて、象をこなしているウワバミの絵の話が重要な伏線として物語

られている。

子供が原始林を題材にした絵本に刺戟されて描いたとりとめもない絵であるが、星の王子様がいろいろな星めぐりをする間中、考えている「大人ってほんとうにへんなものだなあ」という、本当のことを見ることの出来ない大人と、ほんとうのことを見抜く力のある子供の対比という、この物語の主題の一つをここで浮かびあがらせてくるのである。

象はフォン・フランツあるいはイブ・モナンが書いているように象徴学によると、知恵・中庸・純潔・清浄・敬虔・永遠・力などの表象である。

またウワバミは全てのものを呑み込み、これを無に帰せしめる死の暗黒を表象している。

この絵は、現実の世界の動乱を表象すると同時に、最終的には死すべき人間の不安と焦燥を表していると思われる。

そうして、これはサン・テグジュペリの意識の中に動いている、大事なものであるいは本当のものが失われようとすることに対する不安を表しているのである。

さて、II話になりそこは千里も人里から離れた砂漠の中である。これがこの物語の舞台である。サン・テグジュペリの人生において、砂漠との出会いは数多くあり、砂漠についての記述も著書の随所にみられるが、当時の世界の状況と同じように、一つの極限状況であって、そのまゝ坐せば死の世界である。すなわち砂漠はその中に泉を秘めているとはいえ、不毛と虚無の象徴である。サン・テグジュペリはこの虚無を一番恐れたのだと私は思う。彼は次のように言っている。



「われわれは永続を求めない。たゞ行為や事物が突然に意味を失うことだけを求める。それらが意味を失うと、われわれを取りかこむ虚無があらわになる。(夜間飛行 99p)

サン・テグジュペリは、この虚無の中に、「城砦」を築こうとするわけである。それは創造である。

「城砦よ、私はおまえを人間の心の中に築くだろう。」(城砦 1 32p)

この虚無の中で、飛行士がまどろんだ時、不思議な小声で眼を覺まされる。即ち意識が目覺めさせられたわけである。

サン・テグジュペリは、

意識とは生命である。と「手帖」において次のように述べている。

「生命現象と私が云うのは意識が現れる現象という意味である。」(「手帖」 149p)

「私が権利をもつのは物質＋意識から生れた生命だ。」(「手帖」 149p)

「生命と意識の同一性」(「手帖」 150p)

「眼を想像する力があれば、飛行機の場合のように眼は生まれるだろう。おもうに意識は創造的なものなのだ。」(「手帖」 142p)  
等と書いているように「意識」を創像の根源であり、言語を媒介として意識化することによって「存在」そのものたらしめると考えていた。

フロイトの精神分析への批判において、

「しかし私はいかなる形においても無意識的なものが意識的なものに対立するとは思わない。無意識なるものは、個人を構成している構造の総体である。意識はこの構造に言葉の範疇(カテゴリー)を加える。私が象徴に

よって自分を表明するのはきわめて自然だ。」(「手帖」<sup>95p</sup>)

「知識とは真理を所有することではなく統一ある言語を所有することである。」(「手帖」<sup>98p</sup>)

「私はそういう象徴が言葉によるぎこちない表明よりもいつそう完全であることを知っている。」(「手帖」<sup>99p</sup>)  
と書いている。 また

「意識をもつことは文体を獲得することである。」(「手帖」<sup>103p</sup>) と。

このように、私はこの「星の王子さま」を理解・鑑賞する鍵は「意識」であると思う。

*Quand une drôle de petite voix m'a réveillée.* と砂漠の中で呼び起されたとき

飛行士(すなわち作者の分身である)の意識即ち生命の中に、別の意識が立ち現われて存在しだしたのである。

「星の王子さま」の一年程前に出版された「戦う操縦士」の中で、アラスの高空にあって飛行機を操縦しているときに、突然、彼自身の意識が、彼自身を拡大し偉大にし普遍化する「真人間」(L'Homme)が現われ、というより彼自身の意識が「真人間」そのものになり、サン・テグジュペリの意識が共にその中に包含されて別に意識しているという体験が書かれているが、今また、砂漠の中で、その「真人間」が、飛行士即ち作者自身である詩人の中に、立ち現れたのである。次のように書かれている。

*Et j'ai vu un petit bonhomme tout à fait extraordinaire qui me considérait gravement.*

この全く不思議な様子をした小さな子供の「真人間」は「戦う操縦士」では、自己自身の意識が拡大して「真人間」となり、それに内包されて自己の意識もあつたわけであるが、「星の王子さま」では、相対する存在とし

て、飛行士と星の王子さまの主客に分化して現われたのである。

大人の飛行士と子供の「真人間」

ここには、サン・テグシュペリが、1話で、

「思うぞんぶん、おとなたちのあいだで暮らしました。おとなたちのようすを、すぐそばで見ました。でも、ほかの考えは、たいしてかわりませんでした。」

「おとなの人ってものは、よくわけを話してやらないとわからないのです。」

「おとなの人たちときたら、じぶんたちだけでは、なに一つわからないのです。」

絵を見せては、

「ほんとうにもものわかる人かどうか知りたかったのです。」

と書いているように、大人たち、即ち人間に失望していたのである。

これに対し、子供はものごとの本当の意味を見抜き理解するものとして描かれるのであるが、これを「真人間」である星の王子さまに托するわけである。

また子供の姿をとったのは、人生において子供から大人へと真実のことを学び、自己の意識のうちで、いろいろなものと交換しながら存在を獲ちとっていき創造を続けているのが人間であることを示すためである。

「人生は、それをすこしずつ交換するときにしかな意味をもたないことを、私たちは知っていたのです。」（「城砦」

1  
51p)

このようにして、砂漠の中で飛行士の意識と星の王子さまの意識の主客相対の中で、物語は進行するのである。星の王子さまと最初にあった夜——夜空に王子さまの星が一つ輝いていたはずである——から、少しづつ星の王子さまの辿った人生が明らかになる。

星の王子さま一人が住めるような小さな星での、毎日の秩序ある生活が続く。そこに突然外の世界から飛んできた種から咲きでた美しい花。この時、星の王子さまは始めて他者を意識した。そうして、いろいろな相互関係がおこって人生が始まったのである。孤独から脱し、人間（他者）と世界に目を向け始めたのである。

サン・テグジュペリは著者のいろいろなところで絆（きづな）という言葉を使っている。

「今日の人間を人間や事物にむすびつけている愛情のきずなは、数もおおくないし、張りきっていることもほとんどないので、人間はもう、むねかしのように、それが切れていることに気づきはしない。」（「人生に意味を」<sup>224p</sup>）  
「文明は一つの目に見えない財産なのである。それは、事物にささえられているものではない。事物をひとつずつむすびつけていく目に見えぬきずなにささえられているのだ。（「人生に意味を」<sup>226p</sup>）

この絆は、他者との係わりの中から生れ出てくるものであり、孤独から脱したとき生じていくものである。

自分の星に咲きでた世界で唯一のものと思った美しい花とのいざこざがあつて——旅に出る動機。理由としては、いささか物足りないが、それだけナイーブな感受性・愛という大切なものを知るための授業料と考えたい。

二度と戻らない覚悟をして生れた星を後にして旅に出ることになる。X話にあるように職を探すのと勉強をするために（pour y chercher une occupation et pour s'instruire）旅に出るのである。すなわち、他者との係りからくる絆を求めて旅に出るのである。

双話で狐に問われて、

「人間さがしているんだよ。」「友だちさがしているんだよ。」

と星の王子さまは答えるが、小惑星 (asteroides) 325〜326 番の間を勉強し職を探しながら、「大人とはほんとうにほんとうに変なものだなあ。」と繰り返して呟きながら、星の王子さまは真なる「人間」を「友達」を求めて旅をしたのである。

六つの小惑星には、それぞれ一人づつの人が住んでいた。他を統治することなく、ひとりぼつねんと玉座に坐っている王様。讚美されることだけを望みに、それにしか反応できないうぬぼれ屋。酒を呑む恥しさを忘れるために酒びんの前につくねんと坐って酒を呑んでいる酒呑み。紙に夜空の星を数えて書き込み、金庫にしまつて所有していると思ひ込み、人のためには何の役にも立たないビジネスマン (businessman)。命令で街燈にいそがしく燈を点じている点燈夫。自分では見たこともない山や川や海を他人の報告だけで地理学書に記入している地理学者。彼らは皆、他者への配慮・関心は自己中心的で、独善的であり、一方的な孤独な人々である。一・二を除いて人の役には立たない。そこには絆を求める心はない。絆の結び目になろうとする心はない。閉ざされた孤独の中に安逸をむさぼる存在にすぎない。

他者に目覺め、他者を意識し、絆を創り出したいと願う星の王子さまは

「大人つてほんとうに変なものだなあ。」

と思ひながら、次々に、すぐにそれらの星を去つて旅をつづける。

ただ点燈夫の働いている五番目の星と、地理学者の六番目の星の所だけ

«Les grandes personnes sont bien étranges», se dit le petit prince, en lui-même, durant son voyage.

と各星で少しづつ表現は変わるのだが、「大人ってほんとうに変なものだなあ。」という星の王子さまの哀しい感慨が書かれていないが、それは点燈夫について星の王子さまが「ぼくにこっけいに見えないひとといったら、あのひときりだ。それも、あのひとがじぶんのことでなく、ほかのことを考えているからだ。ぼくは、あのひとだけ、友だちにすればよかったなあ。」(XV話)

と考えるように、自分の意志からではないとはいえ、他者のために街燈をつけるという、他者との絆があるからであり、六番目の小惑星の所では、地理学者から教えられた

「はかない (ephemere) ……そのうちに消えてなくなるという意味だよ。」(XV話)

という言葉から、この物語の最も重要な主題である、星の王子さま自身の星に咲いた花への愛と、後に狐に教えられる

「めんどろみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなければならぬんだよ、バラの花との約束をね……」という愛の義務というか、人間同士の絆を大切に守るといふ心を思い出させられたことと、また地理学者が「地球を見物しなさい。なかなか評判のいい星だ。」と教えて、他者への温い配慮を示したことによると思われる。

そうしてはじめに着いた地球は、誰もいない無人の荒涼としたアフリカの砂漠であった。砂の中を動いている月の色をした環のようなヘビに会う。そこで意味深い会話が交される。

「星が光っているのは、みんながいつか、じぶんの星に帰っていけるためなのかなあ。ぼくの星をごらん。ちょうど真上に光ってるよ。…だけど、なんて遠いんだろう！」

「美しい星だなあ。なにしにここに来たの？」

「ぼく、ある花といざこざがあったね。」

「人間たちはどこにいるの…砂漠って、すこし淋しいね。」と星の王子さま。

「人間たちのところにいったって、やっぱりさびしいさ。」とへび。(Ⅷ話)

ここには、地理学者の「はかない」という言葉に触発されて、自分の星に残してきた愛の対象である花のために故郷の星へ帰らなければならぬという思いと、友達を探し求めながら、なかなか真の友人に出会うことの難しさと孤独な淋しさが表されているのである。

「ところで王子さまが砂漠と岩と雪をふみわけて、長いこと歩いてますとやっと一本の道を見つけました。道というものは、みな、ひとのいるところへ通じているものなのです。」(Ⅷ話)

こうしてまた星の王子さまは「人間」を求めて旅をつづけていると人里の庭に、五千も咲いているバラの花をみつけ、

「ぼくはこの世に、たった一つという、めづらしい花を持っているつもりだった。…ぼくはこれじゃ、えらい王さまなんかになれようがない……」といって草にうつぷして泣くのであるが、自分にとって特別な他には類のない大切な「もの」あるいは「こと」が、ありふれたつまらない平凡なものにみえた時の幻滅の悲哀が、心を打つ場面である。

この時、キツネが現われて、この物語の圧巻である「飼いならす」(apprivoiser)ということを教える。このXXI話は学ぶために(pour s'instruire)旅を始めた星の王子さまにとって最も大切な学ぶべきことが話されているのである。それはまた、サン・テグジュペリにとっても人生における最大の関心事であった。

「飼いならすって、それなんのこと。」と星の王子さまは狐に何度も執拗に尋ねる。

「よく忘れてることだがね。へ仲よくなるってことさ。」

「あんたが、おれを飼いならすと、おれたちは、もう、おたがいに、はなれちゃいられなくなるよ。あんたは、おれにとって、この世でたったひとりのひとりになるし、おれは、あんたにとって、かけがいのないものになるんだよ……」

星の王子さまが、なんとなくわかりかけてくると

「きまりがいるんだよ。……そいつがあればこそ、ひとつの時間が、ほかの時間とちがうわけさ。」と狐は言う。飼いならすためには

きちんとした方式、絆を作り出すための、思考の形式、意識に投影されるイメージが必要である。

サン・テグジュペリは「手帳」の中の創造についての考察という條りで、

「詩的なイメージをとり出すと一般にそれは論理的秩序の分節によって両者の間につながりのある二つの相似する要素から成り立っていることがわかる。詩的であるのは創造的な行為だ。これらの要素は比較の各項が精神を満足さすに足るほど明白な論理的つながりをもっていない。しかし全体は精神に対して論理的なものとして提示されるので、それは立体鏡に映った二つの虚像が似てはいないが同一対象を示すものとして提示されたと同然



である。精神はこの同一性を回復するために、空間（あるいは遠近法）を創造する。

詩的なイメージの場合には論理的なつながりを樹てそれを有効化するために、精神はまたひとつの世界（ユニバーサル）を創造する。……

人は更新され、一種の新たな文明に所属するのだ。詩的なイメージの真価はこの潜在的な世界の価値であって、要素の価値でも、結びつきの価値でもない。」（「手帖」<sup>128p</sup>〜<sup>129p</sup>）  
と述べているが、きまりをきめることによって、詩的イメージが意識の中で創造する世界に飼いならされた者達は愛の絆に結ばれて遊ぶわけである。

また狐は言う。

「さっきの秘密をいおうかね。なになんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないことってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ。」

「あんたが、あんたのバラの花を、とてもたいせつに思っているのはね、そのバラの花のために、時間をむだにしたからだよ。」

「めんどろみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。」

ここにいう「飼いならす」とは、自他の相互関係を愛によって結びつけるということである。人と人、人と物、とを時間をかけ、きまりを守ること、深い絆をつくりあげ、結び合せることである。その時、相互の意識の中で離れ難い一つのものとなって、輝くような愛を感じ合うのである。それは創造であり、美しいイメージであり、詩である。

キツネのあげるイマージュは美しい。

「でも、あんたの足音がすると、おれは、音楽でも聞いている気もちになって、穴の外にはいだすだろうね。……あの向こうに見える麦ばたけはどうだね。おれは、パンなんか食やしない。麦なんて、なんにもなりやしない。……だけど、あんたのその金色の髪は美しいなあ。あんたがおれと仲よくしてくれたら、おれにや、そいつが、すばらしいものに見えるだろう。金色の麦をみると、あんたを思い出すだろうな。それに、麦をふく風の音も、おれにやうれしいだろうな……」

星の王子さまは、たったひとりの住める小さな星からやって来て、星めぐりをし、地球にやってきて、飛行士すなわち著者と会い、一年経過して、ふるさとの星が、ちょうど真上にめぐり帰ってきた時、互に心を開き、友情（愛）で固く結ばれた日、そうして大切なことを学んだときに、別れの時を迎えるのである。

人間の一生を思わせる構成である。

星の王子さまが、自分の小さな星を離れて旅に出るとき、渡り鳥たちがほかの星に移り住むのを見た王子さまは、いいおりだと思って、ふる里の星をあとにしたのだと、ぼくは思います。とIX話にあるように、王子さまがふる里の星を離れるときは、その身体をつけたまゝであったのに、地球から花への愛ゆえにふる里の星へ帰るときには、へびに足をかませて肉体的には死んで、身体をすてゝ——もつともその身体は跡かたもなく消えていたのであるが——意識だけで、自身の星へ帰るのである。話の構成上この点は少し納得のゆかない矛盾することのように思われる。これは、単に、子供は鶴（コウノトリ）が運んでくるといってお伽話と同様に黙って聞いていればよいとも思われるが、「手帖」の中に

「ところで生命現象と私がいうのは意識が現われる現象という意味である：私が権利をもつのは、物質プラス意識から生れた生命だ。」（「手帖」<sup>139p</sup>）という言葉があるので、この物質プラス意識から生まれたのが、砂漠で出会って王子であり、

「肉体が崩れる時、初めて本心が現われるのだ。人間は絆の塊だ。人間には絆ばかりが重要なのだ。」（「戦う操縦士」<sup>139p</sup>）

とあるように、肉体に重要性を感じなかったサン・テグジュペリにとっては、今、この物質である肉体を捨てて、意識（その中には飛行士の描いた羊の絵も刻みこまれている）のみで、王子さまがふる里の星に戻って行くのは当然のことのように思われていたのかも知れない。蛇足であるが此の物語に女性を表象していると思われる花以外には女性が登場しないのも不思議といえば不思議に思われる。

註 および 参考資料・文献

○引用文は次のものから引用させていただきました。なお一部は山崎庸一郎訳の「サン・テグジュペリ愛と死」（ジュール・ロワ）中の選訳の文に変えました。

「夜間飛行」

堀口大学訳・新潮文庫

「南方郵便機」

堀口大学・新潮文庫

「人間の土地」堀口大学・新潮文庫

「戦う操縦士」堀口大学・新潮文庫

「星の王子さま」内藤濯訳・岩波少年文庫

- 「ある人質への手紙」粟津則雄・清水茂訳・みすゞ書房
- 「城砦」1・2・3巻 山崎庸一郎・粟津則雄訳・みすゞ書房
- 「人生に意味を」渡辺一民訳・みすゞ書房

Œuvres” Antoire de Saint-Fxupéry Gallinard.

○参考文献

- 「サン・テグジュペリの生涯」ルネ・ドランジュ 山口三夫訳・みすゞ書房
- 「わが知れるがまつ」レオン・ウエルト
- 「星の王子さまとわたし」内藤濯・文芸春秋
- 「サン・テグジュペリの生涯」山崎庸一郎・新潮社
- 「星の王子さまの世界」塚崎幹夫・中央公論社
- 「永遠の少年」M.Lフォンフランツ・松代洋一・椎名恵子訳・紀伊国屋書店
- 「サン・テグジュペリ」アンドレ・ドウヴォー・渡辺義愛訳・ヨルダン社
- 「サン・テグジュペリ愛と死」ジュール・ロワ・山崎庸一郎訳・晶文社
- 「サン・テグジュペリの世界」リュック・エスタン・山崎庸一郎訳・岩波書店
- 「空を耕す人」上・下巻 カージェイス・ケイト・山崎庸一郎・涉沢彰訳・番町書房
- 「Saint-Fxupéry」Pierre Cheverier Gallinard.